

## 47. 関節リウマチにおける呼吸器病変の存在パターンと進行因子

内科学（リウマチ・膠原病）

田中彩絵, 高村雄太, 宮尾智之, 山崎龍太郎, 新井聡子, 大和田高義, 前澤玲華, 有馬雅史, 倉沢和宏

【背景】関節リウマチ（RA）の肺病変は多彩で、患者の治療方針や生命予後に関連する重要な関節外病変である。生物学的製剤（Bio）投与下RA患者における肺病変の新規出現や悪化に関連する危険因子について検討した。

【方法】当科のRA患者でBio投与前後に胸部HRCTを施行した208例を対象とした。投与前のCT所見を20の病変に分類し、さらに間質性病変、結節性病変、気道病変、その他の4つに分類した。それぞれの病変のBio投与後の変化とそれに関連するファクターを検討した。

【結果】208例の背景は女性144名（69.2%）、平均年齢59.2歳、罹病期間7.9年、抗CCP抗体、リウマトイド因子の陽性率は80%を超えていた。TNF阻害剤の導入が84.1%、メトトレキサート（MTX）の使用は65.3%、ステロイドの使用は75.4%であった。Bio投与前のCTで146名（70.2%）に異常所見を認めた。病変は間質性病変38.9%、結節性病変21.6%、気道病変55.3%、気道病変は異常所見を認めた患者の大多数で合併していた。2回目のCT施行までの期間は平均3.26年で画像所見の新規出現・悪化の危険因子として高齢、高齢発症、既存の肺病変、気道病変が同定された。MTXは肺病変の悪化には関連しなかった。9名が呼吸不全で死亡し、既存の肺病変、特にreticular pattern, honeycomb, bronchiectasisがその危険因子であった。

【結論】Bio投与下で画像所見の新規出現・悪化は43%の患者で認められた。既存の肺病変、特に気道病変のある患者は画像所見の新規出現・悪化に注意すべきである。

## 48. 当科モモアレルギー症例におけるモモアレルゲンコンポーネント測定の有用性

小児科学

安藤裕輔, 宮本 学, 加藤正也, 中山元子, 福田啓伸, 吉原重美

【背景】果実アレルギーには、即時型アレルギー（Immediate Allergy, 以下IA）、花粉-食物アレルギー症候群（Pollen-Food Allergy Syndrome, 以下PFAS）、食物依存性運動誘発アナフィラキシー（Food-Dependent Exercise-Induced Anaphylaxis, 以下FDEIA）があり、各々でアレルゲンコンポーネントが異なることが報告されている。

【目的】モモアレルゲンコンポーネント特異的IgEを測定し、病態および症状を比較検討する。

【対象】2012年から2017年に当科を受診し、症状誘発歴及び検査結果からモモアレルギーと診断した小児期から青年期の27症例をアナフィラキシー群（IA：5例、FDEIA：8例）とPFAS群（14例）の2群に割り付けた。

【方法】モモ粗抗原, Pru p 1, Pru p 2, Pru p 3, Pru p 4, Pru p 7, 花粉特異的IgEをイムノキャップ™により測定する。

【結果】2群間の性別や採血時年齢に差を認めなかった。モモ粗抗原特異的IgE, Pru p 1, Pru p 4, ハンノキ特異的IgEはPFAS群で有意に高値を示した。Pru p 7はアナフィラキシー群で有意に高値を示した。

【考察】Pru p 7は成人において重症モモアレルギーに関連することを報告されている。本検討は小児期から青年期を対象としており、より低年齢においてもPru p 7が重症モモアレルギー症例において高値を示す可能性が示唆された。また、Pru p 1とPru p 4は成人において口腔アレルギー症状に関連すると報告されている。本検討では、PFASとPru p 1, Pru p 4の関連が低年齢において示唆された。モモPFASの原因花粉として、シラカンバ花粉と同じカバノキ科に属するハンノキ花粉が関連する可能性が考えられた。

【結論】小児期から青年期のモモアレルギー症例において、モモアレルゲンコンポーネント測定は症状の重症度および症状の予測に有用であることが示唆された。